

トークイベント

## 仙台 R 計画

竹内昌義と馬場正尊が語る  
都市のリノベーション

日時：2012年7月22日

会場：せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア

出演：

竹内昌義（建築家／本学建築・環境デザイン学科 教授）

馬場正尊（建築家／本学建築・環境デザイン学科 准教授／共創デザイン室 主幹研究員）

司会：本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。只今から、東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科主催のトークショー、仙台 R 計画を始めたいと思います。自己紹介は先生方にお任せしたいと思います。よろしくお願いします。

竹内：こんにちは。東北芸術工科大学の竹内と申します。

馬場：東北芸術工科大学の馬場です。どうぞよろしくお願い致します。

竹内：今日は馬場さんと私とで、仙台 R 計画ということでお話をしていきたいと思います。私、竹内は、東北芸術工科大学で建築を馬場さんと一緒に教えておりますが、一方で横浜にあります「みかんぐみ」という建築事務所で、友人3人とともに、4人で建築の設計事務所をやっております。仙台では、駅前にある「テラスエル」というカフェの内装を担当し、実はこの仙台メディアテイクのオープンの時にも、みかんぐみで参加をして、かろうじて佳作を頂いています。では、馬場さん。

馬場：はい、馬場と申します。山形の東北芸術工科大学で教え始めて、もう4年ちょっと経とうとしておりますが、半分は東京の神田日本橋、老舗のお店が並ぶようなエリアの一角で設計事務所をやっています。僕は古い建物を再生するリノベーションの仕事をこの7~8年一生懸命やってきました。それが山形で、東北で、そしてさらに仙台で展開することが可能なかと思いながら、東北の地で建物や街を見たりする生活をしています。

竹内：馬場さんが、「東京 R 不動産」を始められるきっかけになった「R プロジェクト」という任意の団体があって、そこで私も馬場さんと知り合ったり、一緒に R プロジェクトをやったりしております、その話も今日していただけるのかなと思います。で馬場さん、今 R 不動産って全国にどのくらいあるんでしょうか。

馬場：今、東京、金沢、福岡、大阪、神戸、房総、稲村ヶ崎、山形、8つですね。

竹内： まだ仙台 R 不動産はないのですね。

馬場： ないのですよ。作りたいなと思いつつ、果たして仙台という都市がそれを求めているのかな、と思っています。

竹内： なるほど。その辺の R という言葉にまつわる、「もう一回どうしようか」という話も、今日、していきたいと思います。

## リノベーションが求められる社会的背景から「みかんぐみ」の活動へ

竹内： まず一番最初に、今、日本の置かれている状況の中で、一番気になるのがこのグラフかと思っています。2004年に人口のピークを迎え、一直線にどんどん人口が減っていく時代になっています。2050年には、1970年の万博の頃と同じ人口になるのですね。大体1億3千万人が今、日本には住んでいて、それが8500万人、65%にまで下がります。それはかなり大きな変化ではないか考えています。

なぜかという、今、1億3千万人のうちの3千万人が首都圏に住んでいます。もし、首都圏に3千万人が住み続けるとすると、残りの部分は5500万人に減ってしまいます。今首都圏以外に1億人いる人が、約5500万人まで減っていく。半分近くになってしまいます。都市がどんどん縮小して色々社会が変わっていくだろうということになります。戦後今までずっと作り続けてきた建物はきっちり残っていますから、建物を新築する必要がなくなるのですね。

どうなるかという、今日のメインでお話ししていく、建物をリノベーションして、どうやって造っていくのかとか、都市が縮小化していくでしょうし、歩いて暮らせる町づくりなどが求められるでしょう。消費が非常に活発な時には、どんどん作って、どんどん売るという状態になってきますけれども、人口が7割以下まで減ってくると、経済の成長が必要で無くなってくるのですね。というか、同じように伸ばそうとしていると、無理が来る。

人口がどんどん減っていったのに同じように伸びていくということは、一人がたくさん生み出さなくてはいけなくて、今やはり、日本の社会自体が行き詰っている状態なのではないかと思っています。皆さん、GDPは、世界で3位なのですけど、意外と不幸な人が多くて、自殺する率がすごく高いみたいな時代になっています。本当はもっと消費を抑えながらも、どうやったら幸せになれるかということ、僕は考えなくてはいけないし、そういったことの一つとして、リノベーションがあるのではないかと思います。

で、今日、いろんなタイプのリノベーションがあって、僕ら(みかんぐみ)がやっていることとか馬場さんがやっていること、それから、馬場さんと僕とで大学で関わっていることという順番に話していきます。リノベーションと一口にいっても、こんなに広いというのを、お話していきたいと思います。

最初に、これは東京の神田でやった上野ビルのプロジェクトです。一番上に朝日火災海上という保険会社が入っていましたが、昭和30年代後半、ちょうどオリンピックの時に建てられた建物で、1回外装だけをリニューアルしています。リニューアルして、朝日火災海上が入っていたのですけれども、金融庁から、耐震性能が低いビルには、金融機関は入ってはいけないという通達が出ています。結果として、朝日火災海上はこのビルから出てしまうということになって、それなら建て替えよかと言ったのですけれども、建て替えてしまうとテナントさんがいなくなってしまうので、住みながら

改修ができないか、ということになりました。

こちらの建物ですと、揺れが来た時に、建物の窓が空いているところが、より大きく揺れてしまって、建物がひしゃげていってしまいます。窓にも耐震要素を入れ、全体にバランス良く堅くしようというのが、このビルのテーマになっていました。そこで、透明な壁に、こういった形でジグザグの鉄骨を入れて、地下まで揺れた時の力を下に伝えてやるということが必要になりまして、こういう改修をしています。

結果としてですが、この建物の家賃が新築と同じような家賃になったということで、お金をかけて改修しても十分に回収できるようになっています。当初は古いビルのエントランスだったのですが、補強したものがこういう形で出て、メタリックな内装にして、すっきりとさせています。

もう1つ僕らがやったのは、鹿児島県の人口40万人くらいの中間都市ですが、デパートの改修です。三越が使っていたビルですが、もともとは地元の百貨店がやっていて、三越がとってかわって25年やっていたのですが、さすがにその三越が、もうお店をやめると言った時に、もともとのオーナーの方が声を上げたのです。せつかく中心市街地を、これでもっと賑やかにしていきたいのに、非常に痛手だから自分で商売を始めるということでした。商売をもともとやっていた方ではなかったので、僕らに「リノベーションと一緒にやりましょう」と声がかかったものです。「マルヤガーデンズ」という名前ですが、「マルヤ」というのはもともとの名前なのですが、商標登録にできないので、「マルヤガーデンズ」としました。

「ガーデンズ」という名前をもらったので、壁もガーデンにしようということで、全面に植栽を持って来て、外観を変えました。ナガオカケンメイさんにクリエイティブディレクターをやってもらって、ナガオカさんからの紹介で、山崎亮さんというコミュニティデザイナーと一緒にやっています。よくある古いデパートで、内装を何度も何度もやり変えて、プラスチックやビニールが幾重にも重なっていました。非常に低かった天井を全部取り払って、構造をきれいに出して、お店を変えました。床はたまたま石だったのでそのまま使っていますが、天井をとって空間を変えました。

ナガオカさんといろいろ協議をしていくうえで、プラスチックみたいな偽物の材料は使いたくないというのが、彼のコンセプトにあったので、ムクのフローリングを貼ったりしたり、商業用の施設で照明は必ずかなり明るくするのでLEDにするなど、ずいぶん模様替えをしました。D&DEPARTMENT(ディーアンドデパートメント)というのは中古家具のお店ですが、リノベーションらしい空間の中に、古い家具を置いたりしています。

あと、山崎亮さんと一緒にしたのは、それぞれの地域のコミュニティを大事にしようということです。地域の色々な人の活動をヒアリングしました。これは何をしているかと言うと、枕崎にある物産を売っている人と協力しながら、空いているスペースをコミュニティスペースとしてすごく安く貸して、色々なイベントをしていこうというものです。モノを売るだけではなくて、いろいろな人が集まれるような場所を取り入れながら、一緒にお店を育てていきます。

仙台にもきっと古いデパートやホテルがあったりして、そういったものを、リノベーションしながら使っていけると、いろいろなことができるのではないかと思います。

で、続いて、「リノベーションと言ったら馬場正尊」なので、馬場さんのいろいろな事例からお話をしていきたいと思います。

## 「東京 R 不動産」の活動

馬場：僕はこの7・8年主に、東京の東側、神田とか日本橋とか、名前は有名ですが問屋街でけっこう空き物件がたくさんあるエリアで、古い建物の再生をやっていました。こんな感じのビルが廃

墟になっています。これをデザインの力でいかに変えていくことにチャレンジしました。

で、リノベーションという言い方もありますが、インテリアデザインとも言えると思います。建物の構造体は変えずに、もしくは弱い構造体をもっと頑丈にして、そのインテリアのデザインを変えることによって、もうほとんど価値が無いビルを、パンッと違うものに変えます。

まずこれですね。築 40 年ぐらいでもう 7 年間空きっぱなし、これ、どうしたらいいのでしょうか。

竹内： これはリーマンショックでダメになったものですか？

馬場： リーマンの前ですね。もともと呉服問屋さんが倒産したらしいのですが、1階が倉庫になっています。ぼろぼろだけど、僕らから見るとカッコよくないですか？ タイルの感じとか。今は1階がスタジオに、上が住居やオフィス、いわゆる SOHO になっています。

竹内： ヨガスタジオになっているのですよね。

馬場： ヨガスタジオです。倉庫もとの階段をあえてそのまま残して、古いところに新しいものをガンッと入れるような、とてもシンプルなデザインです。で、これは最上階のペントハウスですね。残すところは残して、お風呂など水回りはきちっときれいにする。そのギャップ、コントラストをはっきりさせます。一見、乱暴なデザインに見えますけれども、けっこう人気があって、周りの新築物件よりも値段が高くなっていますね。

竹内： 住んでいる人がいるのですか？

馬場： いましたね。でも、最近、カフェなどに変わっていたのですよ、この前行ったら。いろんな用途に変わりながら受け継がれています。これは鉄板を折り曲げて本棚をつくる、インテリアの実験ですね。で、これは、水道管を折り曲げて洋服掛けを作っています。

竹内： 水道は入ってないのですよね。水道管のふりをした洋服掛けなのですね。

馬場： そうです。物事の見方を変えるとデザインも変わってくるということです。ここに住むのか、という見方もありますが、今の 20～30 代の方は、このくらいざっくりしていて、自分たちが参加できる、デザインのスキがあるような空間の方が好きだったりしますね。

竹内： 一見丁寧でキレイだけれども、よく見ると全部貼りものやプラスチックだったりするマンションと、まったく逆と考えればいいのですね。

馬場： そう、素の素材だけを組み合わせ、そっけないけれども…というデザインになっていますね。こういう仕事の依頼もあって、このビルはオフィスなのですね。オフィスとしては不便なところがありすぎて、相談されたのですが、屋上に上ったら、ものすごい風景が待っていました。でも、この風景がなんとあの壁の向こう側にあったのですよ。このビルを設計した人には、風景を愛でるセンスがなかったのですかね。

竹内： たぶん敷地図があって、とにかく図面を書いてほしいと言われて、しかたなく書いて、その

周りの風景など見ていなかったのではないですか。

馬場： そうかもしれませんね。もったいない。あの風景を取り戻すことができるのならば、住居としては最高だと言って…こうしてみました。まあ、白く塗って、窓を開けられるところだけ構造計算してガンツと開けて、向こう何が見えるかといえば…東京の摩天楼です。

竹内： なんか壁紙が貼ってあるかのように見えますが。

馬場： 違います違います、本当に見えています。で、階段を上がっていくと、これは最上階ですね。ちょっと計算すると、少しだけ天井に穴が開けられることが分かって、階段をここに付けました。とんとんと上っていくと、こんな風景が待っています。屋上って実は、本当に使われていなかったのですよ。空調の室外機を片方に寄せて、庭として、こう再生しました。ビルの屋上とは実は一番良い庭ではないかということで、象徴としてバスタブ置きました。ちゃんとお湯も出ます。

竹内： ここに入っていると誰かに見られたりしないですか？

馬場： はるか彼方の向こうのビルから見られるはずはないのですが…基本、いいだろうという気分でも入ってもらえると思います。お風呂だけでこの物件、大人気にはなりますよね。

竹内： リノベーションする時の極意、コツはありますか。

馬場： まず、あきらめるところは潔くあきらめる。ただ、特に日本人はとても繊細なので、人間が手で触るところだけはしっかりデザインする。そうすると、きれいなところとそうでないところの差が出て、よりきれいに見える。

竹内： なるほど。実はメディアテイクも意外と天井がラフですよ。

馬場： そうですね。この辺はやはりデザインの技術ですよ。あと、マイナスをプラスに変える。

竹内： あー良い言葉ですね。

馬場： 屋上は全く使えない無駄なところだと思われていますが、こんな使い方もありますよ、と提案してあげると、こうなるのです。

竹内： ただ使えと言ってもダメで、お風呂を置いてここに裸でゆったりと入っている人の姿が想像できるから、良いなあとみんな思うのでしょうか。

馬場： 古い建物を再生してインテリアのデザインを採用する時、現場はぼろぼろですよ。目を閉じて、どんな風景なのかと夢を膨らませて、パーンと来た時にはけっこう良いものができますよ。あ、これもマイナスとプラスですね。1階にどうしても駐車場を付けなければいけなかった。

竹内： 附置義務ですね。

馬場： そう、専門的には附置義務です。だけど、ここに駐車場のシャッターが来たら、入口がぼろぼろになってしまう。だからシャッターを透明にして、1階にアトリエを作る。そうすると絶対車好きが入居するから、良い車がとまる。見せびらかしたい車がとまるので、エントランスが華やかになって、マイナスがプラスに変わります。

これは、勝どきという場所で、海沿いの倉庫ですね。昔はここに船が泊まっていたんですが、今は廃れて使われていません。でも、ちょっとカッコいいでしょ。

竹内： いや、カッコいいし、次の写真を僕は知っているのです。ここからの落差を、みなさんは想像しているわけですよね。

馬場： そうですね、はい。この落差…こうなります。極端な話、フローリングを貼って、その上にガラスのキューブをポンと置いただけです。ただ、それは明らかに周りの質感とは違えます。

竹内： これは何になったのでしたっけ。

馬場： 靴屋さんのオフィスとショールームを兼ねた空間になっています。すごく暑い時、すごく寒い時だけ、ガラスの中で働いて、あとはその辺のところでミーティングなどしていますね。

そこの水辺で打ち合わせをします。これは夕方ですね。これが一番気持ちの良いところです。オフィスでパーティーをしています。新商品発表会ですね。

竹内： わざわざ展示場借りなくてもよくなった…。

馬場：

そう、展示場1日借りるのに100万円ほどするのに、これは1ヶ月借りても何10万円ほどなので、それだけで元が取れると言っていましたね。これは、発想の転換で価値も逆転するということですね。

これは印刷工場ですが、夕刊フジという新聞を印刷していました。注目に値するのはこの空間。輪転機という巨大な印刷機が置いてあったために倉庫にもできない困ったビルで、ずっと空いていました。でも僕らから見るとカッコいいわけです。で、今は「タブロイド」という名前の複合ビルになっています。

タブロイドとは小さな新聞ですね。建物をみんな文字で囲って、さきほどの輪転機置き場を巨大なライブスペースに変えています。オープニングイベントがレディガガのシークレットライブでとても話題になっていました。

ここは元お風呂場です。僕がうろろうしていた時にこんな風景だったので、「あ、これで工事止めてください」と言って止めました。この古い味を活かしたまま、今、写真スタジオになっています。

竹内： こういうデコボコがあっても写真スタジオとして成立するのですね。

馬場： 逆にこのデコボコは新築では作れないから良い、そういうニーズがあるのはなんとなくわかっていたのです。雑誌のバックなどにこのシーン、時々ありますよ。

竹内： 寸止めしなければいけないということですよ。やりすぎではいけない。

馬場： そうです。これもそうですね、オフィスです。真正面から、これはスタジオです。元工場だったという物語は活かしている。2階はカフェになっています。

竹内： このエントランスホールにカフェがあるのですけど、ものすごく賑わっていますよね。

馬場： 働いている人がみんなここでご飯を食べているから、コミュニケーションの中心地にもなっています。なんにも使われていないビルのエントランスがたくさんありますが、ぜひカフェなどに改造しましょう。これは屋上、気持ちよくすると、お約束になっています。

竹内： ベイブリッジが見えていますね。

馬場： はい、結婚式の二次会など、よくここでやっています。花火がものすごい良く見えますね。価値が1円もなかった屋上が一番良いと…。

竹内： 次は、学生の話をしていただきたいのですが…。

馬場： わかりました。ちょっと大きめの話が多かったのですが、最初始めたのはこれです。僕の事務所の一番最初です。こういう小さな建物があって、改造したところで働いてみたいと探して、見つかったのがこの駐車場です。これをリノベーションしたい。暗い倉庫だったのをバンッと開けて、塗ただけでもこんなに変わる。建物の価値は案外ちょっとした工夫でこんなに変わるということ、この小さな事例は見せてくれました。

そこで「東京 R 不動産」というのを思いついたのです。何故かというと、この空き物件を借りるだけでもとても苦勞して、不動産屋に改造したいと言ったら、「原状復帰して元に戻して返してくれなくては困る」と言われました。

もう理不尽極まりないですね。オーナーは最初不安がっていたのですが、これ見に来たらすごく喜んで、「これ、良いね！」と言ってくるわけですね。

そこで思ったのは、借り手側と不動産屋さんの間にもものすごい感性のギャップがあって、もう埋められない。もうそれ自体がすごく面白いと思いました。東京 R 不動産では、最初は東京に眠る、実は面白いのだけど、ボロとか、普通の人にはなかなか分かりにくい物件を発見しては、文章と写真で伝えていくメディアを作ったのです。

竹内： 最初は不動産屋じゃなくて、見つけて発見して発表するサイトだったのですよね。

馬場： そうそう、これがビジネスになるとは夢にも思わず、オタクなブログですね。古いビルをこれ面白いとブログに上げていたら、いろんな人から「これ借りられないのか？」と問い合わせがたくさん来て、作ったのが東京 R 不動産。今、年間 300 万ページビュー、会員も 3 万人以上いて、ちょっと面白い人たちがたくさん見ている。不動産仲介サイトではあるのだけど、ブログとしてもものすごく見られているという不思議なサイトになっています。

竹内： あの三井不動産、安田不動産と並んで、いきなり東京 R 不動産。「不動産」をグーグルで検索すると 3 番目くらいに出てきますね。1 番上かもしれないですよ。

馬場： まあ、こうやって改装 OK とか、天井が高いとか、レトロな味わいとか、築年数が古いのを偉いと威張ったりしているわけですが、新しい価値基準で空間を見ようというのが、このウェブサイトです。なかなか探せないような物件が出てくる仕組みになっています。

そういう状況で、空きビルだらけだった、この東日本橋神田というエリアが、どんどん埋まっていくのです。

最初はこれです。竹内さんたちと一緒にやった、「空きビルを2週間だけタダで貸してください、オーナーさん、いろんな人が見に来るから…」と説得して、アーティストと組んで空きビルに作品を並べて、エリア全体をギャラリーにするという企画です。地下でクラブをやってみたり、ショップをやってみたり、僕の事務所も一瞬お店にしたり…。そうすると、こういう一見ぼろい、でも僕らから見るとなかなか味があって良いビルに、宝石屋さんが入ったりして、どんどん町が変わっていくというような風景を見ました。

## R 不動産は山形へ、そして次は…

仙台も、このメディアテイクの裏あたりで、実はこういうリノベーションが少し始まっているのをご存知ですか？ 結構カッコいいのが、ぽつんぽつんとあるのですよ。こんなギャラリーができていました。メディアテイクで温められた文化、仙台文化の熱が、街に飛び火していく時期に来ているのではないかと思います。地図を作ってみたのですが、空きビルだらけだったところに、80 か所新しいお店ができています。

竹内： 今、わざわざそのいろんなお店を回るツアーが、流行ってきていますね。

馬場： 「セットトリップ」と言いますが、日常化しています。一戸一戸の建物のリノベーションが街に、あるいは都市のリノベーションに広がったという事例。これは、竹内さんや僕、仲間たち10数人で10年間やり続けた成果かな、と思います。

竹内： だんだんいろんな人が集まってきて、町が変わっていくのが実感できたのはすごくおもしろかったですよね。

馬場： おもしろかったですね。貴重な経験をしたと思います。でも、大都市ならありえるのではないかと思いますね。

竹内： で、今度は地方都市。山形で、大学でやっていることを…。「山形 R 不動産」の話でしょう。

馬場： では、山形 R 不動産の話を…。東京 R 不動産をやっていて、山形に教えに行くようになって、「ならば山形で R 不動産やるよね」という空気がいっぱいでした。とりあえず始めてみて、今、山形 R 不動産は続いているのですが、当たり前ですが、東京とは全然違います。仙台は東京と山形の間ではないかと思います。山形で一生懸命こうやっておもしろい空き物件探すわけですね。だけどもある日、学生が持ってきた地図がこれです。「馬場先生、空き物件だらけなのですよ。どこから



手を付けていいか分かりません。」みたいな…。そこで、山形 R 不動産では、どこにでもある空き物件に対して、「こうしよう」という提案をどんどんするようにしたのです。駐車場があったら、冬でもやれるフットサル場だろう、とか。

で、そうこうしているうちに、今、学生とリアルなプロジェクトが動いていて、これが芸工大の特徴だと思うのですが、こういうボロ物件、学生たちが見つめてきた元旅館ですね。7年間空きっぱなし、「これを自分たちの手で改造しよう」と学生たちの間で盛り上がり、今、学生たちのシェアハウスになっています。こういう厨房だったのが、みんなのリビングダイニングになっていて、ここでみんなでわいわい言いながらご飯を食べたりする。設計も学生たちがやって、半分電気とか給排水はプロ、残りのデザインは学生。こうやって会議をしたり、イベントやったり、これはビフォーですね。ザ・旅館みたいなところが、これ、同じ空間です。あの押入れのところが DJ ブースになっていますけど、彼がデザインして、彼が一部工事をしました。

竹内先生： やはりペンキ塗るとというのが一つの基本作業ですかね。

馬場： そうですね、あの白いペンキはマジックで、かなりキレイになりますね。でも、建物がどういう構造になっているかというのは、解体しながら皆覚えていく。すごく楽しそうでしたね。自分たちの空間を自分たちで作りました。ただ彼らは調子に乗って、隣のビルも変えていこうと言って、1階をシネマカフェという、映画をテーマにしたカフェに変えてみたりしています。

竹内： あのテーブルがちょうどこのミサワクラスの建物の形と同じになっているのですよね。

馬場： そうそうそう。細かい…これですよ、建物を縮小したテーブルになっています。イベントスペースを作ったり、2週間だけオープンする宿を作ったり。あと、また調子のもって、近くの花小路トランクという古旅館を改良して、またこれを学生たちのシェアハウスに。黒板塗料というのを発見して、その塗料を塗ればどんな壁も黒板になるというので…こうなりました。

竹内： 黒板塗料って便利な塗料で、どこに塗っても必ずくっつきますよね。

馬場： そうそう。で、これ、コミュニケーションのボードになっていますよね。冷蔵庫に塗って、「今日実家に帰るね～」とか、「今日なにになにを買ってきたので食べてください」とか書いてあったりする。いろんな人の私物があって、ちょうど犬がいましたけど、ここで勉強したり、冬は鍋やったりもしていましたね。自分たちでデザインして、自分たちで企画して、そして自分たちで住む、みたいなことが山形 R 不動産を中心にして起こり始めています。

竹内： 次に紹介してもらうのは、これを見てくれた鶴岡の旅館の旦那さんが、ひとつ大きい部屋を改築してくれないかと持ちかけてきた話ですよ。天皇がお泊りになる建物を建てて、1部屋が100平米、10m×10mという巨大な部屋があるのだけど、それを芸工大の学生と僕らとでリノベーションしたものですよね。

馬場： これが間取りですね。元天皇が泊った部屋ですよ。雲の部屋っていうテーマで、ヒノキの木がグオーッと空間全体を覆うようになっていて、窓の向こうに水平線がビシーッと見える。その美しい風景を切り取る、その時間を楽しむというコンセプトの部屋ですね。そのコンセプトもやはり学生

たちが考え、そしてプレゼンし、竹内さんや僕がサポートしながら創り上げていくというプロセスを踏みました。なので、すごく高級な旅館の一室が、半分学生たちの力によってできている。

竹内： 僕らは破綻しないように見守って、すごく歯がゆかったのですが、学生たちが急に積極的に自分たちで動き出したのはすごかったですよね。

馬場： ドキドキしながら見守っていました。こういう曲線は、もしかすると僕と竹内さんだけだったらもうちょっと守りに入ったデザインだったかもしれません。お風呂は真っ黒で塗られています。

これは一緒にコラボレーションした吉村靖孝さんという、日本の若手ではすごく有名な建築家やってくれた隣の部屋です。そのプロの技術と、学生の技術が並びながら、切磋琢磨していくという経験を学生時代にできました。さきほどの自分でペンキ塗るところから、こういう高級旅館のデザインまで、「いつかお金を貯めたら是非泊りに行ってくれ、自分がデザインしたところに…」というような話ですね。これは鶴岡の亀屋さんですね。

竹内： 山形だけに限らず、仙台の事例をお願いします。

馬場： 仙台の本町で学生たちと一緒に、去年から今年にかけて、またリノベーションしました。それは本町、予備校とか家具屋がかたまっているエリアですね。駅から15分くらいのところ。団地の一室を仙台のデザインホームという会社の方から、「大学とコラボレーションでやろうよ」って声かけてもらって、学生と一緒にこの団地の一室を改造していきます。

これはリノベーション前、よくある団地ですね。築35年くらいです。で、学生たちと現場を調査してみても、測っても、これをどうしようと…まずスケルトンにします。スケルトンにするプロセス、工事のプロセスを学ぶのもすごく貴重ですよ。「建物ってこんなふうになっているんだ～」と、今、思っているところですね。

で、学生たちは5つの案を提案します。おもてなし案です。企業の人たちに模型を作って学生たちがプレゼンしました。たった60平米でもこんなにたくさん間取りがあることに、僕自身も驚かされましたね。

竹内： 逆に、僕らが実際に仕事をしていて、多分こういうパターンがあるだろうな、というのが全部ありましたものね。

馬場： そう、5つの中に。で、模型をかなり正確に作ってくれるから、出来上がりがかなり分かるわけですね。

竹内： それでこれらの案のうち、どれをつくるのかを、産学共創プロジェクトということで、デザインホームさんと芸工大とで、同じようにHPにアップして、人気投票して、大人の予想ではない案が選ばれたのです。やはり、人気をきちっとこういう形で投票したということで、どういうふうにしてものが決まってくるのかというプロセスが学生に対してオープンだった。実際に人気がありそうということが、工事をした後にも、多分売れ行きにも大きく響いた。作ったデザインがどうやって流通していくか、そこまで勉強させてもらったかな、という感じがすごかったです。

馬場： そうですね。ここで人気投票して、市民からの得票が一番多かったのができた。これは本

当に人気投票だったのですが、さきほどの団地がこんな部屋になっています。これは学生と企業の本当にコラボレーションでできて、このクオリティまではちゃんと出せた。しかも、オープンハウスをしたら、地元の企業、家具の松田の方なども協力してくれて、こうやって家具でスタイリングしてくれたりしたのですね。本当にありがたいと思います。モデルルームにしたら、初日に申込が3件入って、大成功と言っていいと思いますよ。この壁、学生たちが自分で1枚だけ塗りました。

現場のミーティング、大学でのプレゼンテーション、模型を作って審査するとか、思考錯誤をこうやって繰り返して、ショールームに行ってどれを選ぶかなど、設計のプロセスを全部やっています。これは普通、会社に入ってやることですね。それを大学3年で経験できた。

竹内：何がどうなっているという仕組みが分からないと、提案しにくいじゃないですか。だから、きっと彼らは大学で課題をやるのとは全然違った経験ができた。あと、すごく大きいのは、社会の人としゃべる場で学ぶ価値だと思っております。

馬場：温かく見守っていただきありがとうございますっていう感じですよ。これがきっかけになって次のプロジェクトに進んでいて、こうやって町に繋がりができていくということは、大学としても嬉しいですね。

## エネルギーを作る家「山形エコハウス」

竹内：あと、大学でやっている取り組みを、リノベーションだけではなく、馬場さんのスライドでもう少し…。芸工大では環境と建物の関係を大切に考えていて、エコハウスを作っているのです。作っている中で、エネルギーを使わない家作りは、そう難しくないことが分かってきました。で、今ここに描いてあるのは、「新しい故郷」という名前で、地震の後の復興の考え方を示した絵です。

僕らが考えている「環境に優しい」とは、スマートハウスなどと言われている機械的なものではなくて、太陽の光や熱を、風通しを良くして使う、すごくベーシックなものなのです。そういうエネルギーの形があるのではないか。なので、作る家は木造で、家それぞれに太陽電池を載せて、家を再生可能なエネルギーでまかなえるものにしていこう、というプロジェクトです。それぞれの家の断熱の性能が非常に優れていて、エネルギーを無駄にしません。

仙台は東京より確実に3℃か4℃、平均気温が低いんですけど、やはりそういう断熱をしている家はあまりなくて、エネルギーを無駄にしていると思うことがあります。これからエネルギーの値段がどんどん上がってくるかもしれないですけど、木造で断熱をしっかりして、太陽電池を載せながら、エネルギーがほとんどかからない家を造ることを、提案しています。

実際に絵を描くと、専門家からいろいろ怒られたりします。例えばこの太陽電池、太陽電池のメガソーラーみたいなこと考えているんですけど、こんな山ではメンテナンスできないじゃないかと怒られたり、風車はそこじゃなくて山のでっぺんなんだよ、など、いろいろ教えてもらいますね。こうやって絵を描いて提案すると、逆に、自分たちのできないところまで、いろいろな専門家に教えてもらえます。こういった新しい故郷作りを積極的に東北で展開していきたいと思っています。

馬場：リノベーションという考え方もありつつ、新しいコンセプト、新しい概念の集落。それは多分エネルギー的にもデザイン的にも、性能的にも、おそらく最先端のものを取り上げて、そしてなおかつ、ここで描かれているような、穏やかで美しくて東北らしいこの風景がちゃんと維持できる。最先

端の集落、住宅とは何かというようなことを、うちの大学は今考えていて、実際、被災地でこういう提案をし始めるところですよ。

竹内： で、実際それを適用しようと考えているのですけれども、お金もかかる話なので、今はどういう家を建てたら良いのか、とか、もうちょっと大きな集落的な、集団的な話をしなくては…というところなんです。今週末 28・29 日、本学オープンキャンパスをいたしますので、ぜひその時に、このモデルとなっているエコハウス、エネルギーゼロの家をご覧ください。

一見見ると大した家ではなくて、木造の普通の家なんですけど、壁の厚さ、屋根の厚さが違って、断熱材がたくさん入っている。それから、ドイツ製のサッシが入っていてトリプルガラスなのですね。今、普通はペアガラスですけど、より性能が高い。

中はこんな感じです。普通の家でありながら、実はこの家はエネルギーを一切消費しません。ここで使っているエネルギーよりも、屋根で生み出したりするエネルギーの方が多くて、二酸化炭素を出してなくて、二酸化炭素、カーボンマイナスの家になっています。実は東日本大地震の後、2 日間停電した際に、温度が 18℃から下がらなかったですね。3 月の日差しがずいぶん家の中の室温を暖めている、というような状態になっていました。

今日は「仙台 R 計画」というテーマでお話をしてきましたが、Rとは、リシンク(Rethink)、リノベーション(Renovation)、リメイク(Remake)など、そういう R なんです。やはり家自体、都市自体、これからはストックを利用しなければいけない、と先ほど話をしましたが、その中でも、今ある家の概念自体を変えていけたらなあ、とも思っています。質問コーナーで色々質問を受けますが、馬場さん最後になにか一言。

馬場： はい。東北芸術工科大学には、竹内先生とか僕とか、多様なキャラクターがいます。ランドスケープ、それから環境エコ技術、歴史、都市計画、いろんな先生がいて、それらの専門分野を持ち寄りながら、もちろん授業もあるけども、最大の特徴は、お見せしたように、実践的に仙台、山形などで、地元の企業とプロジェクトを作りながら、そのプロジェクトの中で新しい発見をして、技術・デザインを学んで、そして創っていくことだと思うのです。

このエコハウスも、大学のプロジェクトでありながら、多分、性能は日本で最高水準、上から数えて 4、5 戸の中に確実に入るレベルの先端モデルです。で、ここで得た知見、技術を、実際の住宅にインストールしていく、そういう実践と学術とのサイクルが成り立っていくと、地域にとってもすごく良いのではないかと思います。

#### 会場からは専門的な質問が…

竹内： 今日はどうもご清聴、ありがとうございました。僕や馬場さんは、普段建築家としていろいろな活動していて、それを大学でもやりたいと考えているので、今日は駆け足で話をしました。できたら皆さんの質問をいっぱい伺いたい。質問のある方は挙手をお願いします。

参加者： 今日はどうもありがとうございました。前に、ミサワクラスにお邪魔させていただいたのですが、仙台でそういったものがあれば教えていただければと思いました。

馬場： 仙台にシェアハウスってあるのですかね。東京ではものすごく流行っていて、コンセプトのあ

る新しい下宿だと思ってください。みんなのリビング、みんなのダイニングみたいなものがけっこう豊かで、気持ちよくて楽しくて、だけど個室はちゃんとある建物なのですね。で、東京でいくつかやって、山形でも学生がやってみたくて言ったのもあって作ったのですが、仙台はどうなのですかね。シェアオフィスとしては卸町の方に「トランク」がありますよね。仙台の卸町の実験はすごく面白いなあ、あれがどんどん進んで行くのかなあというふうに見ています。シェアハウスの方は、逆にご存じの方がいたら教えてください。今からそういうことをやっていきたいと思っていますね。

竹内： これから出てくるのではないですかね。どうですか。

参加者： 私もやりたいと思っています。

竹内： では是非…。はい、ほかに質問ありますか。はい、どうぞ。

参加者： 東京の商社で働いています。リノベーションで町を活気づけて、面白くしていくところに非常に魅力を感じています。リノベーションをやる時に、お客さんから「こういうふうに変えてくれ」と言われた場合には、話はシンプルかな、と思うのですが、自分たちでこう変えていきたいという時に、お金がなくてあまりリノベーションもしてないようなところに、関わっていくのは難しいのかな、と思います。それと関わってくるのですが、自分たちでお金をつける場合には、どういうコンセプトでここをこう変えていきたいという方針を打ち出しているのか、お伺いしたいです。

馬場： 前者は、お金を誰が出すか、リスクを誰がとるか、というお話。2 つ方法があると思いますね。ひとつは、いつも僕らが設計事務所としてやる時には、まず、この建物の良さを分析して、何をどう変えればいいか、いくらぐらいかければ変わるか、そして月どのくらいの家賃が見込めるか、ということ。企画コンセプト・デザイン・収支計算、この3つをセットにして、オーナーさんに、もしくは投資家さんにプレゼンテーションして、この収支があれば、もとよりこの利回りがあればいけますよ、と提案する。だから、企画力、デザイン力、マーケティング力、それから若干の数字、というところは必要になってきます。そうやって提案して納得の上でプロジェクトを進める。それがひとつ。これは東京をはじめ大都市、仙台もそれがスタンダードだと思います。

で、二つ目は、山形のみサワクラスのような、住む人を決めて事業を着手するパターンですね。みサワクラスの場合は12部屋あったのですが、これ、もしもやるとすると、まず、住む人はいるか？ 例えば山形 R 不動産とか東京 R 不動産で呼びかけて、ある人数が集まった。そうすると「家賃3万ならだいたい払えるかな」というニュアンスだったので、では、3×12で36万。36万は無理だとしても、8人決まって24万。月そこまでの収入が見込めるなら、いくらかけられるだろう、というふうにして、オーナーさんに提案する。そしたらその数字があれば、と銀行が融資してくれる、というプロジェクトだったのでですね。

学生のプロジェクトでありながら実はバックヤードでは銀行まで動いていたのです。地方都市で作ってしまっただけで、お客さんがいないということになったら、悲惨なので、それを少しでも回避すべく、住む人の目途をつけてから事業着手する段取りをつけました。これは、どこでもやれることではなくて、偶然大学というプラットホームがあったからできたかな、とは思っています。で、あと、都市の話…。

竹内： 都市の話からすると、一番最初にお見せしたスライドがありますがけれども、都市には地域、地区ってというのがあって、今まではここは何のエリアにするのか全部決まっていて、大きく広がってき

たのです。広がったものを僕らはこれからたたんでいかななくてはいけない、いかにまとめるかという時代に日本は入ってきていると思うのですね。

都市が大きく広がった時に、都市から最初に出て行っちゃったのが住宅です。で、先程の間屋街もそうですけど、いろんな専門的なものが都市に集まってきましたが、それらを今度ギュッとまとめて小さくしたとき、そこに最初に持ってきて一番確実なのは、やはり「住むことだ」と思っています。「いかに都市の中に住むのか」ということを、僕らはこれから考えていかななくてはいけないのです。

で、その中で、ではファミリー向けはどうだろう、という話になるとちょっと難しい。ファミリーは保守的だし、その地域とのいろいろな関係などもあります。けれど、例えば学生だったり若者だったり、ある期間だけこういう住み方をしたい、みたいな人たちがいると、その人たちにそれをゆだねることによって、ミサワクラスもそうですけど、なにかすごいイベントをやったり、活気が出たり、実際ドキュメンタリー映画祭でなにかコアな場所になったりする。若い人にどう任せられるかというのが、これから大きなポイントになるのかな、と思います。

で、プロジェクトにはいろんな大きさがあって、お金がかけられないプロジェクトはどうする、ということになる。若い人は知恵があって、「こんなことやってみよう」と思うのだけど、「元手資金がないからできない」と言う。そういう若い人たちのアイデアは、実はもっとすごいことなのですが、今の経済事情ではそこにお金は出てこない、でも場所ならある、というようなことが出て来る。お金は出せなくてもいろいろ参加してもらうことで、可能性が広がっていくのかな、と思います。

なので、地方都市の場合、特に、そこにどういふ若い人たちがいて、どういふことをやりたがっているのか、ということが、すごいキーになるのではないかと思います。山形では、ミサワクラスの場合ですと、僕らが作ったものに対して、山形に残ろうと決めてくれたアーティスト、他の学科、洋画や日本画や工芸のアーティストたちが、山形に残って展覧会をやったり、イベントやったり、フェスやったりして繋がってきていて、可能性が広がりつつあるのかな、と思います。よろしいでしょうか。

参加者： ありがとうございます。

竹内： ありがとうございます。ほかに質問ありますか？

参加者： 貴重なお話ありがとうございました。不動産仲介業なので、実はあまりデザインは分かりません。今までDKモデルや、LDKモデルなどがあったから説明が楽だったですね。で、そのへんを紹介しているのですが、70年代とか、下手をすると60年代の物件が多いですね。今後そういう改装されたものをお勧めするのに、デザイン的なセンスがないとなかなかお勧めできないのですが、センスというのはどうやって身につけたら良いのかお伺いしたい次第です。

馬場： それは案外シンプルで、ひとつでもふたつでも、事例を作ることだと思いますね。最初は地元のオーナーも事業者も、何を言っているかわからない。3LDKとか4LDKみたいな今までの言語ではまったく説明できない空間を作ろうというわけですが、でもそこにニーズがあるということはうっすらわかっている。

不動産の面白いところとは、たくさんの人にうける必要はなくて、そこに住みたいその人というのを見つければ良いから、小さくてもそこに圧倒的に好きな人が発見できると成立するマーケットではないですか。なので、確実にニーズがあるモデルを1戸作る。成功したらもう1戸つくる。その小さなことを積み上げるしかないのでは、と思っています。どうですか。

竹内： まず、見ることから始めるかなあと思っていて、実は今日スライドには出てないですけど、馬場さんたちが2002年にR不動産プロジェクトを始めた時に、ではアメリカに行って来る、と…。ニューヨークとシカゴとロサンゼルスを見てきた。それが本になっていますが、やはり見るのが大事な、と思っています。いろんな話をいろんな人に聞くところから始まっている。ここから先、馬場さん。

馬場： 捨て去られた中華街の商店街、もうほとんど人通りないのですが、窓を見るとギャラリーに変わっているのですよ。この派手なところから窓を見ると、カッコ良かったですよ。潰れた古本屋さんを古本ごと買い取ってカフェにしている、その古本が良い感じでしたよ。

竹内： 改装費いらないですね。

馬場： そう。でも、古本をそのままインテリアにしたところが人気の秘訣。これは、潰れたデパート。子どもたちのためのギャラリーになっていて、やりたい放題。これは新築なら怒られていたのではないか。これはマンハッタンブリッジですが、ギャラリーに変わっていたのですね。あと、これはシカゴですね。これが一番インパクトあったかな。倉庫兼オフィスのところを全部住宅に変わっていたのですけど、黒いびよんびよん出ているのが、テラス、ベランダです。中がこうです。で、これを住宅として販売していたのですよ。で、キッチン、お風呂、トイレみたいなのが、ゴロンゴロンと置いてあって、「あ、これで良いんだ」と思って…やはり見たのが大きかったですね。

竹内： あの、ちょうど東京の東エリアですけど、馬場さんたちが東京R不動産の本を2冊出して、「あ、こんなのでいいのね」というのはそれを見るとわかるのです。『東京R不動産』と『東京R不動産2』がありますけど、まずそれ見ていただいて…あと、さきほどのマップはどこかでダウンロードできましたっけ？

馬場： できないね。もうすぐ、webアプリが完成して 아이폰などでゲームになるので…。

竹内： まあ、もうすぐアプリになるらしいので、そのアプリをとっていただいて、東京の東地区でどんなことをやっているのかをまず見ていただくと、あ、私に関わっているこの物件も、良い感じになるかもしれない、と思えるかもしれないので、そこからまずやっていただくと良いのではないのでしょうか。

参加者： では、東京の東地区、ちょっと行く機会があるので、見てみたいと思います。どうもありがとうございます。

竹内： よろしくお願ひします。あのスカイツリーと一緒に。スカイツリーのところでですね、最近よく「セットエリア」って言われますけど、僕らが作った「セットエリア」という言葉がテレビで普通に出てきていて、結構びっくりしますね。では、質問続けたいと思います。他の質問、はい、どうぞ。

参加者： 今日は貴重なお話をありがとうございました。仙台の不動産の鑑定業をやっております。冒頭で馬場さんが、「仙台R不動産」を作ろうか、とおっしゃいましたが、R不動産的なものが受け入れられる都市の条件のようなものがあれば教えてください。

馬場： やってみて、人口によってやり方が変わるっていうことはわかりました。東京と同じような方

法では、100万人以上の人口がいないと、なかなかやれない。で、今、金沢などではそういうカルチャーがすごく温まっているのですよね、だけど、人口がないからそんなにマーケットとしては大きくない。なので、どんどん提案していかなければいけない。だから設計企画とR不動産は常にセットになっているというような感じになっています。で、山形などは物件が本当にないので、どんどん自分たちで作っていかなくてはいけないんだ、ということはわかってきました。

仙台は、まだどういう都市なのかわからないのですよ。リノベーションができれば人気があるのか、その実験といったら失礼ですけど、本町プロジェクトなども多分一緒にやっていただけたのだと思っています。やはり街の文化、人口などによって違うというのが実感ですかね。

竹内：「今、名古屋が来てる！」という話を聞いたことがあります。やはり大規模な都市で、あらゆる情報がきちっとまわって、メインなカルチャーよりサブカルチャーが好きな人が一定以上いないと難しいという感じですね。でも、仙台には、多分いそうな感じがしますけどね。はい、もうちょっとアマチュアな方から質問が…ほしいです。

馬場：全部プロの質問じゃないですか。かわいい質問はないですか。

## 若い世代に贈るメッセージ

参加者：東北大学工学部建築学科の1年生です。まだまだ建築のことを全然知らないのですが、今日はリノベーションの話が聞いて、結構視野が広がったかな、と思います。僕は大学ではまだまだ基礎的なことばかりで、建築は勉強していなのですが、これから建築の専門に進むにあたって、「建築とは何か、建築家とはどういう仕事なのか」、お二人の考えが聞けたらと思います。

馬場：一番難しい質問が…。僕としてもはっきり答えられるかは不安で、その状況や年齢によって揺れ動いていると思っています。ひとつ、一貫して変わらないのは、世の中に対して何か新しい実験を提示していくこと。新しい価値だったり空間だったりデザインだったりを提案する役目がある職業であると、思っています。

で、大きい企業からちょっと離れて、大学のようなプラットフォームを使っているからこそ可能な実験的なこと、新しいことを、提示しやすい立場にあるし、それを選んでいるわけです。僕の場合は、そこが揺るがないようにしています。僕は建築業界の中ではすごく変わり者で、もともと広告代理店出身だったり、町づくりのことをやっていたり、R不動産と言って不動産業まで一緒にやることになっているので、ものすごく領域横断的で、「お前何者だ？」ってよく言われます。「僕も自分は何者なんだろう」って思うことがよくあるのですけれども、新しい空間とかデザインを通して、新しい価値とか実験を社会に提示するという意味で、「建築家」ということにしてもらおうかな、というスタンスで仕事をしているかな。だから僕は、空間を作っているプロフェッショナルリティを軸にしながら、他の領域と繋いで建築という業界をより楽しく豊かにしていきたい、というスタンスを持っています。

竹内：難しい、本質的な質問ですね。すごく一義的に言うと、建築家というのはクライアントがいて、「僕はこういう建物を作りたい、作ってくれる？」と言われて、それに対して設計をするのが仕事です。で、それはお金がある場合も、ない場合もあるし、すごく大きいものもあれば、すごく小さいものもあるかもしれない。まあ、それでも「設計」とよく言いますが、ただ「こういうものを作ってください、



ではこう作ります」ということが仕事かと言われると、ちょっと違うかと思っています。

先ほどのあの復興の話でもそうですけど、「新しくもう一回、街を作ります」と言った時に、ただ作ればいいのではない。やはり、壊れてしまったもので、コミュニケーション、お互いのものや人間関係をどうやって保ちながらどうやって新しい建物を作るか、ということが大切なのですね。で、その建物も、ただ建て直すのではなくて、そこから先の未来をどう考えていくのか…なんて言うのだろう…。

直接建物の事だけ見ると、すごく近いものしか見えなくなってしまうけど、もう少し引いた時に、世の中どう変わっていくのか、とかいうのが一番大きいですけど、人口が減っていくからこういう町がいいよね、とか、エネルギーの問題ってこうだよ、とかいろいろな問題が実は僕らの周りであって、そこも一緒に考えないと…。

ただ建物を作る…まあそれも難しいことですけど、できるだけ社会の状況などを含めながら作っていききたいし、そういう条件をどんどん増やしながら提案していくと、それが逆に実現したりしていく。そうすると、全然そんなものを見たことない人から、「僕も実はこうしたかったんだ」と言ってもらったりするような…すごく奥が深くて幅が広い仕事ですね。

で、そのどこをやるのかは、それぞれの学生さんの得意なところでも良いし、やってみたいと思うところでも良いし、寄り道しても良いし、設計から広がっていてもいいかな、と思います。いろいろなもの、大学の建築って特に専門的なものにフォーカスするので、それといろいろ他のこととの距離感をちゃんととることが、これからすごく大事なのではないかと思います。そうやっていくと、いろいろ興味が広がって、忙しくなるんですけど…。若いうちでできるだけ吸収するもの吸収するといいいのではないかと思います。いいですか、それで。

参加者： はい、ありがとうございます。

竹内： ありがとうございます。ほかに質問ありますでしょうか。はい、どうぞ。

参加者： フリーターをやっています。たくさん面白いリノベーションの事例を見せていただきましたが、手がけた中でうまく行かなかった事例があったら紹介していただきたいのと、もしありましたら、何故はまらなかったのか、お聞かせいただければと思います。

竹内： はい。難しいな。今日、マルヤの話をしましたけれども、今日こうやって紹介していると、すごくサクセスストーリーのように見えます。実際終わった時にはほっとするくらい、ああ良かったなと思えるプロジェクトだったんですけど、終わる2~3ヶ月くらい前、これは本当にうまく行くのだろうか、と頭を抱えていたのです。

テナントビルですが、誰も借りてくれない状態でした。実際、コミュニティスペースなどいろいろ作って話しましたが、苦肉の策という部分もあって、借りてくれない部分があるから、そこを使って何かしようという部分すらあったのです。で、その時に良かったと思うのは、一緒に組んでいたナガオカさんとか山崎さんとかが、すごくポジティブにいろいろなことを考えてくれて、そこを活かすように僕らも協力して、チームの力でなんとかなったという感じですよ。

うまく行かなかった原因の一番は、見通しが甘かった時があったこと。いろいろな手立てが加えられるか加えられないかと言った中で、「きっとこの辺はなんとかなるだろう。あ、これはいつもと同じだから大丈夫だよ。」と言ったところをつまずくことが多いです。すごく心配していることは一生懸命やるし、そこに注意するんですけど…。で、そのつまずいた時になめていればいるほど、その仕事は本当に怪我が大きい。他人のもので自分たちの考えを表現するので怖いと思います。

で、あと、特に建築を作る時に、僕らの業界では、構造や耐久性の問題は社会的に大きなものです。そこなめると、具体的には言いませんけど、意外と痛い思いをしたことは何度かありますね。だからひとつずつクリアしていかななくてはいけないんですけど、うまく行かないのもうまく行くのも紙一重なのだ、ということで、答えにしていいたいですか。

参加者： はい、ありがとうございます。

馬場： 僕も一言だけ。こうやってスライドで見せたものは、結局でき上がっているから、一応うまく行っている。潰れたプロジェクトはもう山ほど、死屍累々ぐらいの感じなのですよね。計画を途中までやって、やはりこれはダメだ、ここの法律がクリアできない、この収支がどうしてもクリアできない…途中までやってあきらめたプロジェクトも山ほどありますね。そこを深く諦めるのも仕事のうちかと思えます。

竹内： でも、何か次のプロジェクトで使えたりしません？

馬場： まあ、そうですね。でも、ただ本当に一部ですね。

竹内： なるほど。はい、ありがとうございました。他に何か。はい、どうぞ。

参加者： 仙台高校に通う生徒です。今日は貴重なお話ありがとうございました。僕自身、来年受験生で、今現在、東北芸術工科大学の建築・環境デザイン学科に行こうと考えていますが、「デザインを考えると、どこからその発想が生まれてくるのか」と、「普段、どういう視点でデザインを見ているのか」を聞かせていただきたいと思えます。

竹内： デザインの勉強の仕方ですね。幅広いし奥深いし、本当に難しい。まあ僕らも僕らでずっとやっていて、自分の興味のあるところを深掘りしたりするんですけど、まず自分の好きなデザインを何か一個見つけてください。例えばそれがリノベーションでも良いし、R不動産でも良いし、なんでもよいんですけど、そこをまず一回勉強して深く掘っていくと、逆に周りのこと、そこに書いてあって分からないことがいっぱいでてくると思うのですよね。

例えば馬場さんは石山修っていう人の研究室を出ているんですけど、「石山修とは僕は違うようにしたいと思う」、みたいなことが書いてあったとして、では「石山修ってなんなんだろう」って連想ゲームのようにやっていると、どんどんどんどん広がって行く。まあそのうち全体、いくつかあってよいと思えますけど、この分野とあの分野ともう一つこの分野というのがあって、それぞれ掘っていくと、だんだん繋がって、ああ、こういうことだったのね、と分かるようになるのではないかと思います。

馬場： 僕はどうやってデザインに対してワクワクしていたかと思えば、最初は雑誌などをたくさん見ていた。で、あ、カッコいいなとか、それで気分を盛り上げる、イメージをすごく沸かせていたような気がする。で、大学生になったらたくさん旅行に行き、実物を一生懸命見るようにして、それで蓄積するようにちょっとずつ好きになっていった20代前半、みたいな思い出がありますね。

竹内： やはり見に行くと、実感として分かりますよね。

馬場： 分かりますね。

竹内： だから良い建築をたくさん見るのも、すごく大事な勉強なのかと思えますね。僕は昔、西洋建築図集など写真が載っている本を見ていた時に、何が良いのかわからないから、建築なんかできかないかな、などと思いました。実際に見に行ってみて、「ああ、授業で言っていたのはこういうことだったのか」と思ったのは大きいですね。まだその時には、他人の作ったものだろう、などと思っていたけど、あるものを見て、「あ、これそんなに大したものではないけど、こういうのも良いのだったら作れるかもしれないな」と思ったのがきっかけですかね。

馬場： 知識が吸収できると、違うものとか違う発見がすごくありますよね。毎日の日常的なことが全部建築においては勉強になるというか、それはすごく良い仕事かな、と思う。

竹内： はい、よろしいですか？

参加者： ありがとうございます。

竹内： では、オープンキャンパスもぜひ。他は何かありますか？

参加者： 仙台で学生をしている者です。今日いろんなリノベーションの事例を見て、自分どういふに進もうかな、とずっと悩んでいました。

みかんぐみの作品の中で、小学校を手がけましたよね。その時に雑誌で見たのですが、非常にこう、教室と教室の間とか、学校が地域にすごく開かれているような印象を受けたのですね。自分が小学校とか中学校のときの学校とは全然違う雰囲気でした。でも、他の方が手がけた学校の事例などを見ても、最近そういうイメージで作っている学校が多いなと思ったのですが、そういう風潮になってきている要因はどのようなものだと考えられますか。

竹内： 伊那東小学校ですよ。学校を閉じるか開くかっていうのは、すごく今、社会で大きな問題というか、いろいろ議論があるところですね。大阪の池田小学校事件と言って、ナイフを持った人が来て、いきなり生徒を殺傷した事件があって、それ以降、学校を開くべきか閉じるべきかを議論していくことが、かなり重要になってきたのです。

それ以前の建物はできるだけオープンに開きましょう、と言っていたのですが、その地域地域によってどんな人たちが周りに住んでいるのかなども含めて、いろいろなパターンがあるので、なんとも一概には言えないです。地域の、周りの目というのも非常に大事だな、と思っているのと、学校というのは地域、コミュニティの中でもひとつの中心的な建物なので、できるだけ外から皆が来やすいようなものにしたいな、という部分があります。ただ一方で先ほどの事件があったので、もうちょっとどうディフェンスしていくのか、とか、どこでチェックしていくのか、というような、一概にどちらとは言えないのです。

その関係をすごく考えたり、あと、教室と他の部分というのも、僕らの伊那東小学校というのは、完全なオープンスクールではない。オープンスクールとは全部が開いている建物ではなくて、閉めようと思えば閉められるようになっているのですが、それは僕らが実際に小学生の父兄なので、オープンスクールはうるさかった、みたいなこととなど、バランスを見ながら設計しています。自分で考えて、「もっとこういう場所があったら良いよね。廊下みたいなところを図書館にしたら、図書館使ってくれ

るかな」というように、その場その場に合わせて考えています。できるだけ一体感のある、繋がりもてる場所にしたいということで、ああいう設計をしました。はい、よろしいでしょうか。

参加者： すごく勉強になりました。ありがとうございました。

竹内： では、だいぶ時間も過ぎておりますが、最後にもしあれば。はい、どうぞ。

参加者： 僕も同じ東北大学で勉強しているのですが、けっこう迷っているところが今あります。建築を見るのも好きで、自分の思うところとかもけっこういろいろあって、でもなんとなく「最終的に建築って何なのだろう」ってすごくわからなくなる。全然わからない、というのが大部分を占めています。そうすると、いろんなところで専門家の人が言う「良い建築」をいっぱい見て、その中にある理論などもすごく聞いています。でもなんか、自分で思うところがそこにくっつかない。もちろん自分が足りないのだろうとは思いますが、でもその「自分の考え」もあんまり捨てたくないと思ったりします。

建築を今学ぶ立場として、いろんなものがあって、いろんなものが流れ込んでくる場所で、どれくらい自分の考えを持っていたらいいのかと、すごく迷っています。その2つをどう関係させていったらいいでしょうか。

馬場： 言っていることはなんとなく分かる。僕も学生時代に「建築ってなんだろうなあ、どこからどうアプローチしていけばいんだろうなあ。」とっていました。いろんなことがあって整理がつかず、一旦建築ではない広告業界に行ってみようと思ったりした経緯があって、そのもやもやした感じはよく分かります。もやもやしたまま、今、大学の時にできることは、必死で考えたり勉強したりすることだ、と思うのですよ。

で、10年くらいたって、なんかそのバラバラにあったイメージが像を結び始める瞬間がある。「あの時のあれってこれだったのか」と後で理解できることがけっこうある。僕は大学で教えることになるなどと、あまり思っていなかったのですが、竹内さんに誘ってもらってここに来て、大学の先生をやるようになったら、大学の時に勉強していたことが、ものすごく役にたっているのですよね。で、仕事をし出せばし出すほど、それが逆に浮かび上がってくる。

ただ、その当時はサブカルチャーや小説が好きだったし、どちらかと言えばそちらのほうにズバァッと行っていた。でもそれはそれで追求すべきで、それと建築は分かれているわけではなく、どこかでやはり繋がって、繋がった時にすごく豊かな何かになったりする。だから、学生の時には、とりあえず迷わずバンバンいろんなもの吸収する。たぶん後でどこかで役に立つだろうという感じですよ。

スポーツで言うと、どこかの筋力だけではなくて、体全体の筋力をまんべんなく鍛えている方が、いざ高いレベルに行った時には絶対活躍できるわけではないですか。それと似ている感じがある。なので、そこは安心していろいろ学べよ、というアドバイスかな。

竹内： 僕は建築に進もうかどうしようか、すごく迷った時期があって、学校の先生からは、竹内、建築ではなくて、それこそ馬場さんではないですけど、広告代理店に行った方がイベントなどできていいぞ、などと言われて、実際それもいいと思いました。で、先ほど言ったみたいに、いろんな建築を見て、「ああ、こういう建築だったら僕、できるな」と思った時に、すごく考えたのは、「建築をやらなくなったら、ただの人。代理店に入ったら、いろんな人がいる中のただの僕になるな」と思ったのが一個。だけど、建築をこのまま続けたら、多分、「建築をやりたい」とずーっと思っている人とは違う、いろいろな興味がある自分というのは、この世界の中のほうが、実は特徴が出せるかもしれないと思

ったのですね。で、建築に残りました。

残ったと言ってもいろんなまわりの人より僕は気が散っていた。それこそ環境のことであるとか、リノベーションのことであるとか、イベントのことであるとか…、今だから『原発と建築家』という本を書いているのですが、エネルギーのことであるとか、色々気が散っているのですね。気が散っているのは悪いことではない、と僕は思っています。それをどうやって建築に持って来られるのだろうと考えると、意外とこちらに来たのは正解かな、と僕自身は思っています。

だから、迷っていることも、どちらでもいいと僕は思うのですが、どちらでそれを迷うのかというのは、意味があるのかな、と思います。答えになっていますかね。

参加者： はい。

竹内： では、だいぶ時間も過ぎてきたので、そろそろお開きにしたいと思います。

司会者： はい。今日はいろいろスライドがありましたけれども、学生たちが参加しているプロジェクトなど、今、僕らの大学はわりとオープンで、結構コラボレーションしていますね。大学のHPでそういった事例も出ていますので、もし何かコラボレーションのアイデアがありましたら、ぜひご相談ください。

それから、28日・29日の土日、オープンキャンパスがありまして、先ほどお見せしました日本最先端のエコハウスを公開します。よく考えると先生方、大学の演習室、校舎、あれもリノベーションですよ。大学の中身もリノベーションされています。それが今週の土日です。最後に、今日、後ろのブースで入試相談会もやっておりますので、そちらのほうにもお寄り下さい。

今日はご来場いただきまして本当にありがとうございました。先生方どうもありがとうございました。これで終了したいと思います。

(以上)